

権八（上）（其小唄夢廓）

栄えゆく

人一盛り花一時

明日は白井が身の果ても

思案の外の

罪科に

引かれ廓へ通い路の

派手な姿に引き換えて

今日はあわれに散りかかる

浅黄桜と夕嵐

ひまゆく駒の道もはや

かかる網目に大木戸の

色故にこそ命さえ

逢いた見たさは

飛び立つばかり

かこの鳥かや恨めしや

これも由縁の紫と

二人が仲を世にうつと

色品川はかわれども

今日ぞ鮫洲の無常音

駒をとどめて

「ただ今断罪申し渡す」

「謹んで承れ」

「一ツ 元松平因幡守家来

当時浪人白井権八二十五才

右は去年九月中

竹中半左衛門本目丈八等と申し合わせ

上州の商人絹屋弥一を

熊谷堤において殺害し

同人所持の金子五百両を奪い取り

あまつさえ江戸市中所々において

辻斬り追いはぎの重罪をはたらきたる科により

引き廻しの上はりつけの刑に行うもの也

検使米津隼人」

「重き罪科を犯せし権八

はりつけはかねての覚悟

有り難くお受け仕りまする」

「神妙なるその覚悟

さりながらまだ刻限に間もあれば

申し残す事あらば

暫時は上のお慈悲なるぞ」

「アアイヤ

お言葉ではござれども

猶予致さは役目の落度」

「ハテ 人間末期の一言

懺悔さするも諸人へ戒め

いかに権八

これまでお上へその方が

ご苦労かけたる大罪も

この刑場の夕べの露と諸共に

無明の覚め時なるぞ」

「有り難きそのお言葉

今に至りてかえらねど

かく 大勢の方々へ

今権八が身の懺悔

お聞き なされて下さりませ

生まれし故郷は因幡の国

後先思わぬ若気の短慮

義によって人を害し

はるばる下りしこの吾妻路

ふと色廓へ通い初め

しげく行けば浪人の蓄え尽き

盗み取つたる金故に

我と苦しむこの身の罪科

若いお方はとりわけて

見る程の事うらやましく

つい思いつく不見

色と欲とに身を果たす

この世の見せしめ業晒し

業のはかりや浄瑠璃の

鏡に映る罪科とア

今更思い当たりました」

〽われと悔やみの教訓も

心の駒の急がれて

「よくぞ殊勝に申したり

懺悔に罪も消滅なす

と仏もこれを説かれたり」

「人をあやめしその後で

悟つたところが跡のまつり

何の役に立つものか

用意がよくばソレ」

〽こそ名に振る鈴の森

最期場さして来る折しも

〽廓を抜けて小紫

裾もほら 〽駆け来たり

「才権八さん

まだ死なずに居て下さりしたか」

〽我を忘れて走り寄り

「ンしてその方は何者なるぞ」

「はい わたしはアノ吉原の」

「工工艶かしいそのいでたち

ムムさては噂に聞き及ぶ

アノ権八と言ひ交わせし」

「アイその小紫でござんす」

「さてはこの権八に」

「サアこの世で一目逢いたさに

廓を抜けて来たわいなア」

「それ程までにこの権八を

忝ないぞや」

「申しお役人様へ一つのお願ひ

この世の別れにどうぞこの場で水盃を

お許しなされて下さりませ」

「イヤ左様な事が相成ろうか

ソレ追つ返せ」

「アアイヤ お役人様へ申し上げます」

「何事なるぞ」

「最期の折は何事も

一ツの願ひは叶うとある

せめてこの世の水盃を

お許しなされて下さる様」

「お願ひ申し

「上げます」

〽涙と共に願うにぞ

〽情けある警護の役人

「許し難き義なれども

誠にびんなき今際の願ひ

まだ刻限に間もあれば」

「デではござれども」

「ハテ何事も上のお慈悲

暫時とあらば苦しいないぞ

「スリヤお許し下さるとな」

「チエー有り難う」

「存じます」

〽嬉し涙に取りすがり

〽手桶の水を汲み交わす

柄杓の縁長かれと

あの世を頼む

〽南無妙法蓮華経

〽妙法蓮華きょうの今

〽あの世の雲と紫が

いましめ切つて剣の山

すぐに白井が修羅道も

これなん南柯の一夢にて

眠りの夢は覚めにけり。